

市史通信

【目次】

- 大横浜の時代
- 昭和六年の流行りもの
—ベビーゴルフ—
- 横浜の空襲体験記をめぐって
- 開架資料紹介
『横浜の空襲と戦災』
- 市史資料室たより

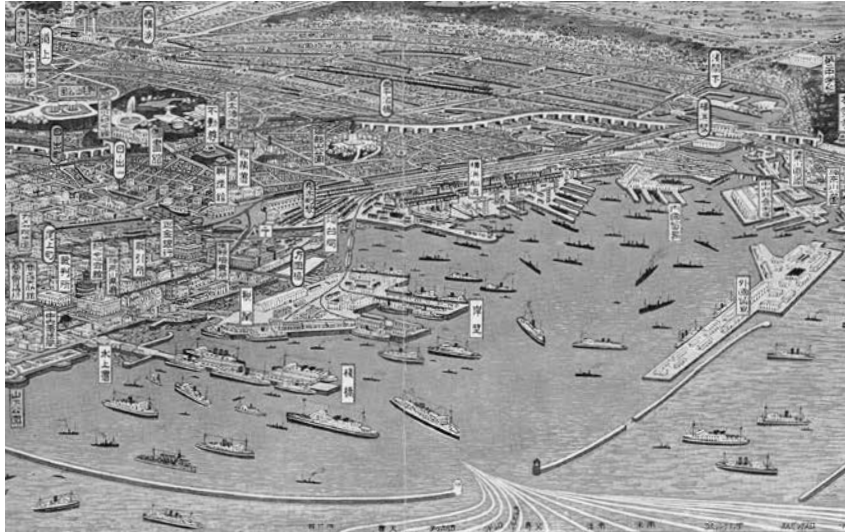


写真1「伸びゆく大横浜」(金子常光作、横浜市中興会発行、1932年12月25日)

中島邦夫家所蔵資料

第21号

【発行日】2014年11月30日
 【編集・発行】横浜市史資料室
 〒220-0032
 横浜市西区老松町1番地
 横浜中央図書館・地下1階
 【電話】045-251-3260
 【FAX】045-251-7321
 【E-mail】
 so-sisiryou@city.yokohama.jp
 【ホームページ】
<http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/housei/sisi/>

大横浜の時代

一九二三（大正一二）年の関東大震災で廃墟と化した横浜は、わずか五年余りで復興を成し遂げた。市内一三ヶ所で大規模な区画整理が行われた後、市街地を走る道路が拡幅・整備され、コンクリート造りのモダンな高層建築が立ち並んだ。臨海部には新たな工業地帯が出現する一方、横浜駅から郊外へと延びる私鉄の沿線に住宅地も開発され始めた。この間、横浜市の面積は一三〇平方キロに拡がり、人口も七〇万人を超えた。震災を機に横浜は新たな都市へと変貌を遂げていった。

震災復興期の横浜

一九二五年五月に横浜市長に就任した有吉忠一は、「大横浜」を新しい都市のビジョンに掲げ、それまでの生糸貿易に依存した横浜市の体質を改善して、本格的な工業都市へと飛躍させることが必要だと考えていた。すなわち①子安・生麦沖合に約六二万坪に及ぶ市営埋立を建設して工場を誘致し、②それらの臨海工業地帯を取り囲むように外防波堤を築堤して横浜港を拡張し、③さらにその後背地として隣接する町村を合併して市域を拡張することを施政方針とした。これらは、「大横浜建設の三大事業」と呼ばれるようになった。一九二七（昭和二）年は三大事業が一齐に始動する年で、この年三月の帝國議会で、鶴見川河口と本牧十二天沖

合を結ぶ外防波堤の工事費の一部が正式に認められたほか（翌年着工）、同年四月に鶴見・保土ヶ谷・大岡川などの九町村が横浜市と合併して市域が三・六倍に広がった。六月二日には市管理立の定礎式が行われ、秩父宮を招いて新装成った開港記念横浜会館で大横浜建設記念式が開かれた。この翌年の市会で、開港記念日をそれまでの七月一日（陽暦）から六月二日（陰暦）に改める件が可決され、現在に至っている。

雑誌「大横浜」

「大横浜」という言葉は、当時の新聞・雑誌など、ジャーナリズムの世界でも喧伝された。横浜のオピニオンリーダーの一つであった雑誌「大横浜」（一九一九年に『実業之横浜』より改題）は、震災以後、様々な横浜の将来構想を提起した。そのうちの「市域拡張と都市計画の性質を論じて商工農の三市是に及ぶ」（一九二七年一月号）は、次のように説いている。今回合併した隣接町村の大半は農村地域であり、都市の食糧供給地として、また商品の消費地としても極めて重要で、今後の市政の方針は、商業・工業に加えて、農業政策をも充実させなければならぬ。この見地から、「大横浜」とはさるなる市域拡張、つまり「現在以上の市域外に都市的計画を加え行くといふ意味に於て、グレーター、ヨコハマと考へて置きたいのである」と、横浜の更なる膨張を高唱している。



写真2 大横浜を誇る雄大なる神奈川県庁（絵葉書）
「左右田宗夫家所蔵資料」

この論説を書いた石渡道助（筆名 笠山）は、実業之横浜社の社主で、この五年後に「超大横浜都市計画」（『大横浜』一九三二年一二月号）を発表している。そこでは、「北は六郷川以南、西は箱根以東、南は三浦半島まで、東は東京湾を隔て、千葉県の一部を包含する地域を設定せんとするもの」と、神奈川県全域から房総半島までを含む広大な後背地を備えた巨大都市・横浜が想定されていた。

大東京と大横浜

もともと「大」を冠して市勢拡充を目指す動きは、川崎や横須賀などの近隣都市でも見られた。隣接町村の合併をめぐる、「大横浜」と「大川崎」「大横須賀」とが対立することもしばしば

あった。「大横浜」という言葉には、近隣都市や他の大都市への激しいライバル意識も深く刻印されていたのである。とりわけ一九三二年一〇月に東京市が周辺の八二町村を合併して、面積五五〇平方キロ（現在の東京都二三区）、人口五〇〇万人の巨大都市が出現したインパクトは格別であった。「大横浜」もやがて「大東京」に飲み込まれるのではないか、そう不安視する人びとも少なくなかった。先の「超大横浜都市計画」はそんな不安の裏返しであった。

一方、「大東京」を前向きに捉える声もあった。西義顕「新横浜論」（『大横浜の未来を語る』東京日日新聞横浜支局、一九三〇年）は、「大東京勢力の切迫」という情勢をいち早く認識し、交通網を整備して、横浜は東京と一体化した工業都市を目指すべきと説く。そのうえで、横浜が完全に東京に埋没しないためには、国内最大の生糸輸出港としての地位を保持しつつ、その都市美を活かして、国際的高級住宅地、あるいは観光地として、内外の人々を誘致することで個性を発揮すべきであると述べている。

一九三〇年代の大横浜

「大東京」の出現後、横浜市政のなかでも、東京に向かうサラリーマンなどを対象とした住宅地開発の必要が叫ばれるようになった。一九三三年二月の市会で、震災復興後の「大横浜計画」を質問された大西一郎市長は、貿易・

工業に加えて、横浜は「東京トノ関係ニ於ケル住宅地トシテノ発展ガ期待シ得ラレル」と答えている。東京横浜電鉄や京浜電気鉄道などの中心部と郊外部とを結ぶ私鉄網が整備され、電鉄会社による沿線開発が進んだことも、その背景にあった。また大西市長の退任直前に開催された復興記念横浜大博覧会（一九三五年）は、六〇日間で約三〇〇万人を集めるなど、市が本格的な観光政策に乗り出すきっかけを作った。

大西の後を受けた青木周三市長は、さらにこの方針を促進した。元鉄道次官の経歴を活かして、桜木町止まりだった省線の延伸を働きかけるとともに、根岸湾の埋立を計画した。また一九三六年一〇月には南隣の金沢町・六浦荘村を合併したが、これは「大東京市を控へ多数都会人の為の安息所として理想的なる住宅地帯を建設」しようとした、青木の施政方針を体現したものであった（『大横浜』一九三六年九月号）。同年、横浜を広くPRするため、土地観光課が発足した。

このように、関東大震災の復興から日中戦争がはじまるまでの約十年間の時代は、横浜では新たな都市像をめぐって華やかな議論が展開され、「大横浜」は時代のキーワードとなった。映画・ラジオをはじめ、鳥瞰図（写

大横浜の息吹を伝える記念品



写真3 栗原清一と妻・芳子
横浜開港資料館所蔵「栗原清一関係資料」

最近、「大横浜」の時代の息吹を伝える記念品が新たに発見された。旧蔵者は、栗原清一（一八八四—一九四四）という人物（写真3）である。栗原は、野毛の薬種商・清八郎の長男として生れ、一九一三年九州帝国大学医学部を卒業、東京帝国大学精神科などで研究・診療活動を重ね、一九二〇年常盤町に脳神経脊髄科の病院を開院した。関東大震災後は、横浜の歴史資料の調査と収集にも力を入れ、『横浜の伝説と口碑』を出版したほか、横浜郷土研究会会長、横浜市史稿相談役、横浜史料調査委員をつとめ、昭和初期の横浜の歴史研究に大きな足跡を残した。

このほか、横浜野球協会や、横浜連合青年団など、幅広い活動を繰り広げた。栗原清一のご縁者の方から、横浜開港資料館に一連の資料が寄贈されることとなり、同館の厚意を得てここに初めて紹介させて頂くことができた。この場を借りてお礼申し上げます。



写真4 開港史蹟見学会（生麦事件碑前）
横浜開港資料館所蔵「栗原清一関係資料」

写真4は、一九三三年六月二日、開港七十五年を記念して開かれた開港史蹟見学会時の写真。この見学会は、高島町の内賀棧橋もしくは西波止場の通船棧橋から乗船・下船して、陸上の五つの史蹟（ペリー上陸地点、山手公園、井伊掃部頭銅像、神奈川本覚寺、生麦事件碑）を巡るツアーで、約八千人が参加した。栗原は史蹟の現地解説を担当したが、写真5はその際に使用したタスキである。五つの史蹟をすべて廻った参加者には、抽選で記念品が授与



(上) 写真6 (右) 写真5
横浜開港資料館所蔵「栗原清一関係資料」

された。写真6はベルトのバックルで、その記念品（三等）である。「大横浜」とは、単に新しいものを追い求めるだけでなく、開港以来の横浜の礎を築いた先人たちを顕彰し、自分たちのアイデンティティを再確認していく過程でもあったことを想起させる。

翌一九三四年の開港記念日には、横浜港工場地帯巡りが行われた。これは、西波止場の通船棧橋からランチに乗船して、海上から臨海工場地帯と建設中の市営埋立地を見学して、「新興横浜ノ躍進振ヲ一般市民ニ視察ノ機会ヲ与ヘ」るもので（『横浜市事務報告書』）、二千人以上を集めた。記念品（写真7上）の上部には林立する工場群、下部には汽船の姿が見える。

「大横浜」の時代を最も象徴するイ



写真7 (上) 横浜港工場地帯巡り記念、
(下) 埋立祝賀開港記念行列(バックル)
横浜開港資料館所蔵「栗原清一関係資料」

青年団野球大会徽章（一九三一年、三年）、吉田橋のミニチュア文鎮（横浜市中興会）なども含まれている。当時の銀製品・銅製品の多くは戦時中の金属供出などで散逸しており、極めて資料的価値の高いものと言える（横浜開港資料館で公開予定）。

（松本洋幸）



写真8 復興記念横浜大博覧会の記念品
横浜開港資料館所蔵「栗原清一関係資料」

業は、有吉市長の「大横浜建設」の三大事業の中核的存在で、その竣工は名実ともに「大横浜」の完成を意味した。

このほか、寄贈資料のなかには、横浜野球協会設立記念ボール（一九三一年三月二七日）、横浜市